北海道『通学合宿』ガイドブック

平成２６年１月

北海道教育委員会

はじめに

近年、家庭や地域の教育力の低下が指摘される中、本道の子どもたちについては、各機関によるこれまでの様々な調査結果から学力や体力に課題があることが明らかになっており、その要因の一つとして、基本的な生活習慣が十分身に付いていないことが考えられております。

こうした状況を踏まえ、本道の次代を担う子どもたちが、変化の激しい社会において自立し生きていくために必要な様々な力をはぐくむには、学校・家庭・地域がそれぞれの役割を発揮しながら相互に連携し、一体となって取り組むことが必要と考えております。

このため、北海道教育委員会では、平成23年度より３年間「子どもの望ましい生活習慣定着事業」を実施し、①親子で毎日の生活習慣を記録し生活リズムの改善を図る「生活リズムチェックシート」の開発と活用、②公民館等に宿泊しながら通学し、望ましい生活習慣の定着を図る「通学合宿」の２つの具体的なアプローチにより、子どもたちの課題解決を図ってまいりました。

特に、実施にあたっては、関係機関や有識者による「望ましい生活習慣定着推進事業検討会議」から御意見をいただきながら、各地域において、学校・家庭・地域・行政が一体となった取組の充実が図られるよう、事業を推進してきたところです。

「通学合宿」は、子どもたちの生活習慣の改善や「生きる力」の育成を図るとともに、家庭や地域の教育力向上が期待できることから、全国各地で取り組まれてきた事例等を参考に、道内19市町村において独自のモデル事業を展開してその効果を明らかにし、「通学合宿」が道内各地で一層取り組まれるよう努めてまいりました。

そして、この度、「通学合宿」の流れやプログラム例、成果などをまとめ、「北海道『通学合宿』ガイドブック」を作成しました。

今年度でモデル事業は終了いたしますが、この「北海道『通学合宿』ガイドブック」を御高覧いただき、今後の道内の市町村における取組に役立てていただければ幸いです。

最後に、本事業に熱心にお取り組みいただきました市町村教育委員会及び小・中学校の皆様をはじめ、御協力いただきました関係機関等の皆様方に対して心より感謝を申し上げます。

平成26年1月

北海道教育庁生涯学習推進局生涯学習課長

浅　井　真　介

目　次

Ⅰ　通学合宿とは …… 1
通学合宿のねらい …… 2
通学合宿の効果 …… 2
通学合宿の広がり …… 3
通学合宿のモデル例 …… 4

Ⅱ　通学合宿をはじめよう …… 5
通学合宿実施の流れの例 …… 6
企画段階ですること …… 7
計画･準備段階ですること …… 8
安全管理について …… 10
広報について（参加･協力者募集） …… 12
実施前の確認事項について …… 13
実施時の留意事項について …… 14
子どものへの指導のポイント …… 15
実施後について …… 16

Ⅲ　通学合宿基本プログラム例 …… 17
通学合宿のプログラムづくりにあたって …… 18
1　生活体験プログラム …… 19
2　知育プログラム …… 20
3　体育プログラム …… 21
4　食育プログラム …… 22
5　独自プログラム …… 23
6　保護者プログラム …… 24

Ⅳ　平成24年度通学合宿モデル事業について …… 25
平成24年度通学合宿モデル事業の実施状況について …… 26
〃　における IKR評定の調査結果 …… 28
〃　実施市町村一覧 …… 29
望ましい生活習慣定着推進事業「通学合宿」モデル事業実施報告書 …… 30

Ⅴ　参考資料 …… 59
開催要項の例 …… 60
通学合宿しおりの例 …… 61
参加者･保護者への連絡プリントの例 …… 62
参加児童健康管理票例 …… 63
持ち物点検表例 …… 64
通学合宿Q＆A …… 65
助成事業 …… 66
生活リズムチェックシート …… 67
出典及び参考

Ⅰ　通学合宿とは

　通学合宿とは、子どもたちが親元を離れ、公民館などの社会教育施設に一定期間宿泊をしながら通学する取組です。
　その始まりは、福岡県庄内市において昭和 58 年に実施した「通学キャンプ」と言われており、平成 １３年度の国庫補助事業「余裕教室を活用した地域ふれあい交流事業」の活動メニューとなったことなどから全国に広がりました。
　通学合宿は、子どもの生活体験を豊かにすると同時に、地域の大人の参画を得て実施することにより、地域の教育力を高める活動として各地で取り組まれています。

　子どもたちが変化の激しい社会において自立して生きていくためには、基礎的・基本的な知識・技能やそれらを活用できる力を育成することが必要です。

　そこで、北海道教育委員会では、「通学合宿」の効果に着目し、家庭における望ましい生活習慣の定着と、それを支える子どもを核とした温もりある地域コミュニティの再生を図ることを目的として、「通学合宿モデル事業」を実施しました。

通学合宿のねらい

■ 子どもたちへのねらい

炊事や洗濯、掃除など、身の回りの日常生活に関わることを子どもたちが協力して行うことにより、日常生活の技能や自立心、協調性を高めるとともに、望ましい生活習慣の定着を図ります。

■ 地域・保護者へのねらい

子どもたちや保護者と地域の結び付きを強め、地域全体で子どもを育てる機運を醸成するとともに、住民の地域活動への主体的な参加・参画を促し、地域の教育力の向上を図ります。

通学合宿の効果

■ 子どもたちへの効果

参加者からは、「新しい友だちができ、交流が深まった」、「働くことや協力することの大切さを理解できた」、「規則正しい生活習慣が身についた」などの感想が得られており、生活体験や多様な人間関係、異世代との交流などの経験により、生活習慣、自主性、自律性、協調性、社会性が身に付くなど、様々な効果が期待できます。

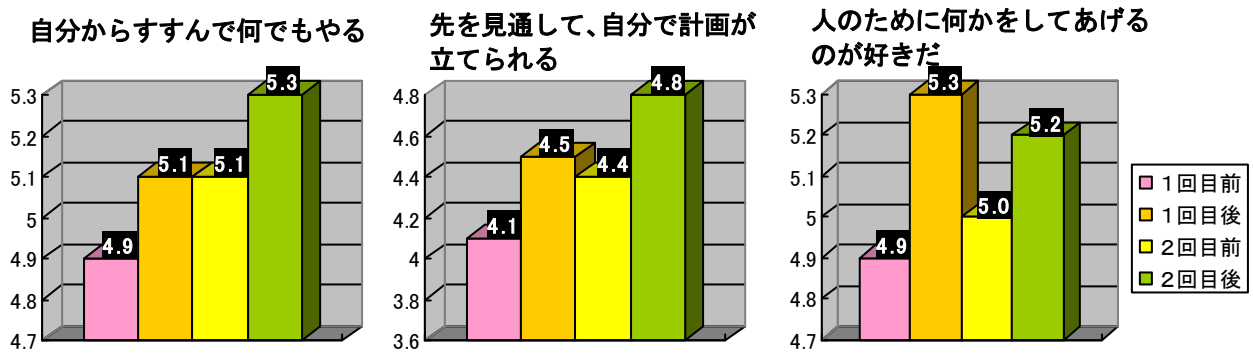
■ 地域・保護者への効果

「子どもと地域の人たちとのあいさつや会話が増えた」、「学校と地域の連携が深まった」、「地域みんなで子どもを育てる意識が高まった」、「住民同士のつながりができた」などの感想が得られており、地域コミュニティの再生や、実効性がある活動組織づくりなどの効果が期待できます。また、保護者に子育てについて学ぶ機会を提供することにより、家庭の教育力向上などの効果も期待できます。

「生きる力」をはぐくむ通学合宿

・・・　道教委の取組から・・・

同一の参加者に対して通学合宿を年間２回実施するモデル事業の全地域で、「ＩＫＲ評定」を活用し子どもの変容を調査した結果、ある地域で次のような結果となりました。



子どもIKR評定用紙　『生(I)き(K)る(R)力』を測る調査

子どもＩＫＲ評定用紙とは、「生きる力」の変容を測定するために開発されたアンケートです。「生きる力」を「心理的社会的能力」、「徳育的能力」、「身体的能力」の三つの指標に分類し、さらに 14 指標に分類した評定用紙で、通学合宿の事前、事後に実施することにより、子どもたちの心や体の変容を分析し明らかにするものです。

上図は、２８項目からなる「簡易版」を活用し、モデル事業に参加した子どもに対し、１回目の事業実施前から２回目の事業終了後まで計４回アンケート調査し、数値が向上した項目のグラフです。

※　「ＩＫＲ評定」の詳しい内容については、２６ページをご覧ください。

通学合宿の広がり

■　通学合宿の広がりは、全国的な傾向となっています。例えば、福岡県では、平成２２年度に実施市町村が８５％に達しており、また、奈良県(平成２２年度から実施)や静岡県(平成１８年度から実施)等のように、県教育委員会が「通学合宿」の取組を推進している事例もあり、それらの県では、実施団体数や事業数が大幅に増加しています。

■　北海道では、道教委が平成２３年度から「望ましい生活習慣定着推進事業『通学合宿』モデル事業」を推進していることもあり、実施市町村数が増え、全道に広がりつつあります。（図１）

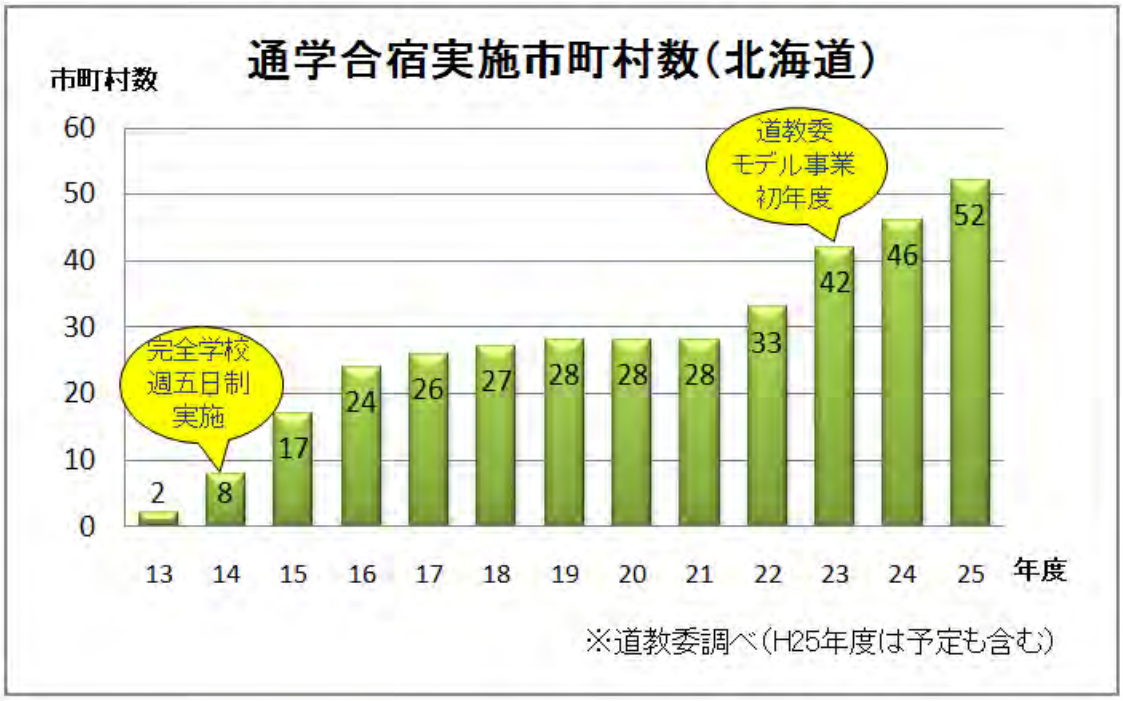


図１　通学合宿実施市町村数（北海道）

■　また、北海道における通学合宿を実施する「主催者」については、教育委員会等の行政組織が最も多い状況となっていますが（図２）、実行委員会※を組織して実施する市町村も３割近くあります。（「既存団体」には青少年健全育成委員会や子ども会育成連絡協議会などがあります。「その他」には国立、道立施設等が含まれます。）　※教育委員会との共催も含む。

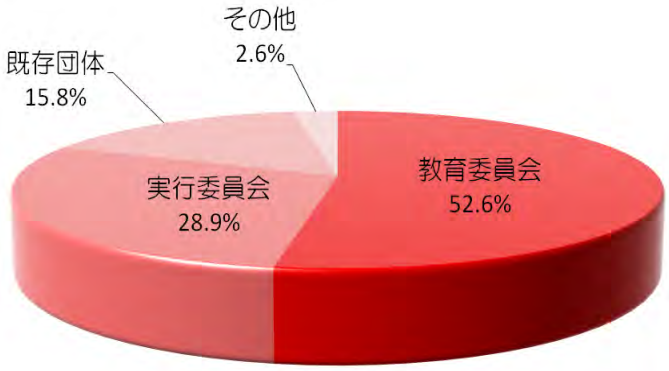


図２　北海道における事業の主催（平成23年度）
（平成23年度石狩教育局社会教育指導班共同研究「石狩の樹」より）

通学合宿のモデル例

道教委モデル事業を参考にしたモデル例をご紹介します。

◆ 同一の参加者を対象に複数回実施することにより、子どもの変容に一層の効果が期待できます。
モデル事業は２回実施としており、１回目と２回目の間に１か月程度の期間を空けています。
◆ 市町村単位、学校区単位、町内会単位など、実施規模は地域の実態に応じて設定可能です。
◆ 期間、対象学年、参加者数、プログラム構成などは、通学合宿の目的を明確にした上で設定することが大切です。

■ 実施期間　１回目　【4泊5日】9月下旬
　　２回目　【2泊3日】１１月初旬
■ 参加対象　〇〇町の小学校4年生～6年生　20名
■ 運　　営
　＊運営協力　学生ボランティア（４名）
　＊講　　師　・保護者プログラム･･･教育委員会社会教育主事
　　・食育プログラム･･･保健福祉課栄養士
　　・体育プログラム･･･体育協会、フラダンスサークル
　　・読書プログラム･･･図書館読み聞かせボランティア
■ 会　　場　〇〇町公民館
■ 主　　催　〇〇町通学合宿実行委員会

■ 企画のポイント
・参加者の生活リズムを整えるため、各プログラムを毎日ほぼ同時刻に設定
・関係機関や団体と連携し、多様なプログラムを実施し、地域の大人との交流機会を設定
・保護者プログラムを実施し、本事業終了後の家庭での望ましい生活習慣定着を促進
■ プログラムの意図
・「夕食会」～保護者や地域住民へ感謝の気持ちを伝えるため、２回目の最終日に手作りの夕食会を実施
・「日記」～感想を記録することで翌日の意欲づけを図るふりかえりの時間を設定

【第１回】　４泊５日

	6	7	8	15		16	17		18		19	20	21	22	
（日）					受付	開会式	IKR	学習時間	自由	夕食	読書	体育（軽スポーツ）	入浴 自由時間	日記	就寝
（月）	起床	体育	朝食	準備	学校生活	学習時間		自由時間	夕食		読書	保護者プロ ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ	入浴 自由時間	日記	就寝
（火）	起床	体育	朝食	準備	学校生活		下校	学習時間	自由	夕食	読書	食育	入浴 自由時間	日記	就寝
（水）	起床	体育	朝食	準備	学校生活		下校	学習時間	自由	夕食	読書	体育（フラダンス）	入浴 自由時間	日記	就寝
（木）	起床	体育	朝食	準備	学校生活		下校	閉会式（IKR）							

【第２回】　２泊３日

	6	7	8	15		16		17		18	19	20	21	22	
（水）	学校生活				受付	開会式	IKR	学習時間		夕食	読書	体育（軽スポーツ）	入浴	日記	就寝
（木）	起床	体育	朝食	準備	学校生活		下校	学習時間	自由	夕食	読書	体育（フラダンス）	入浴	日記	就寝
（金）	起床	体育	朝食	準備	学校生活		下校	日記	IKR	夕食調理 夕食会		閉会式			

それでは、実際に通学合宿を実施する際の流れやプログラム内容を見てみましょう！

Ⅱ　通学合宿をはじめよう

「通学合宿」は、特別な知識や技能が必要な取組ではありません。

子どもたちが、自ら早寝早起きや、学習、読書、運動などを行い、望ましい生活習慣の定着を図ることを目指して、地域の様々な方と一緒に企画･運営することが大切です。

まずは、実行委員会を設置しましょう！！

自律を促す
生活体験を！

長期間で！
（4 泊 5 日以上、
複数回実施など）

様々な団体、
世代が参画で
きるように！

通学合宿実施の流れの例

○　この流れはあくまでも一つの例ですので、各地域の状況や目的に応じた実施形態等に合わせて、それぞれのスケジュールを組んで進めましょう。

組織の立ち上げ

通学合宿実行委員の選出 → 町内会・公民館・ＰＴＡ・子ども会・スポーツ団体・企業・市町村教育委員会・学校等

通学合宿実施の　**約６か月前**

通学合宿実行委員会の設置 → 通学合宿について共通理解を深め、運営組織を設立します。

通学合宿実施の **約３か月前**

円滑な運営に向けて詳細を決定

通学合宿実行委員会開催 →
- ◆　実施時期・場所（宿泊施設）・事業計画等の協議
- ◆　目標、参加対象（学年）、参加人数、予算、プログラム内容等の決定

参加者の募集と決定 →
- ◆　募集チラシ作成
- ※　募集案内を作成し、学校を通じて配布

ボランティアの募集 →

調　　理	… 朝食・夕食の支援
生活指導	… 掃除・洗濯の支援
買い出し	… 食材の買い出しの補助
お 風 呂	… もらい湯の協力
学習指導	… 夜の学習支援
児童送迎	… 登下校・お風呂など
宿　　泊	… 夜間の宿泊の安全管理

事前説明会の実施

通学合宿実施の **約１か月前**

通学合宿実施

通学合宿実行委員会開催 →
- ◆　総括及び反省
- ◆　アンケート調査

企画段階ですること

1　通学合宿実行委員会の設置　　1年～6か月前

- 最初は、準備委員会で取組の核となるスタッフが集まり、実施の可能性を検討します。実施の目処が立てば実行委員会を組織します。
- この実行委員会が、今後の取組内容を企画していくことになりますので、各方面からの参加が望ましいです。

2　「ねらい」の確認

- 通学合宿は、「子どもの成長」「地域の教育力の向上」などを目的に実施しています。
- それぞれの目的に向けて実施計画を作成するので、実行委員会で「ねらい」を十分確認（共通認識）することが重要です。

3　事業経費の検討

- 予算を立て、実施に必要となる経費とその確保について検討します。
- 教材費、消耗品費、会場賃借料、ふとんクリーニング料、スタッフ経費などが考えられます。

4　実施時期と宿泊施設の検討

- これまでの実施の状況をみると、気候のよい６月～11 月頃に多く開催されています。この期間は学校や地域の行事も多いので、計画の際には、関係する学校や地域の行事日程を事前に確認する必要があります。
- 宿泊施設については、公民館、自治会館などが想定されますが、この他に青少年教育施設や民宿、合宿所、野外宿泊施設（キャンプ場）なども含めて検討します。

5　参加対象の検討

- この取組は、主に小学生を対象としていますが、異年齢集団での共同生活となるよういろいろな学年が参加することが望ましいです。（ねらいによっては、その限りではありません。）
- また、中・高校生が学校外活動としてボランティア参加することも有効です。小学生の時に参加した子どもが、中・高校生になった時にリーダーやスタッフとして参加する仕組みが整えば、まさに地域の人づくりを担う事業となっていきます。

6　学校･教育委員会･関係団体への協力依頼

- 通学合宿は「平日」に実施されるもので、子どもたちは宿泊施設を拠点に学校へ登校して普段どおりの学校生活を送ります。
- このため、実施に当たっては「学校側の理解を得ること」が重要です。実施計画を作成する前の段階で相談したり、取組の趣旨を説明するなどして学校の理解を得ることにより、実行委員会に加わってもらったり、参加者の募集やアンケートの実施などに協力してもらうことが可能となります。
- また、教育委員会の協力を得ることも事業を進める上で大切です。教育委員会には、地域の教育情報が集約されており、地域の人材・施設、活動プログラム等の情報を得ることが可能です。
- 実施期間中の習い事やスポーツ少年団等への参加についても、事業のねらいを踏まえ、事前に団体等と協議し、対応を決めておくことが望ましいです。
- 通学合宿を地域の行事として定着させるためには、「地域住民、学校、教育委員会等の協働」により実施されることが理想的です。

計画･準備段階ですること

1　プログラムの作成　　6か月前～直前

・　通学合宿では、子どもを「お客さん」として迎えるのではなく、子どもたち自身が共同生活の中から自発的な活動ができるよう配慮する必要があります。
・　そこで、全体のプログラムを作成するにあたっては、次の点に配慮することが大切です。

子どもたちが主体的に活動できるプログラム	子どもたちへの関わり方についての共通認識
・　異年齢での交流が図られるようにする。 ・　困難な体験、不自由な体験の機会を設ける。 ・　ボランティア活動に目を向ける機会を設ける。 ・　学校での授業に支障が出ないように配慮する。 ・　欲張らず、ゆとりのある日程とする。 ・　地域の人と触れ合ったり、地域の良さが感じられるプログラムを盛り込む。	・　「基本的なことは教えて」、その後は「任せて見守る」という段階的な指導を行う。 ・　子どもたちに役割を与え、「やり遂げる機会」をつくる。 ・　ルールに反する行動や危険な行動をした時は毅然とした態度で「叱る」。 ・　頑張ったことに対してはその場で「ほめる」。

2　登下校の方法

・　宿泊施設を拠点に登下校することになるので、安全を確保するためにどのような方法が最適かを検討します。
・　集団下校する場合、普段の通学路とは異なる経路となるので、地域の方々に「付き添い」をお願いするとよいでしょう。地域でつくる通学合宿として、いろいろな場面で関わっていただき、交流する機会をつくりましょう。
・　事前に登下校の時間帯など学校とも協議するとともに、通学路の危険箇所、不審者情報などについても確認しておく必要があります。

3　食事の方法

・　献立の決定から食材の買い出し・調理・配膳・片付けまでの一連の流れを子どもたち自身が経験することは大変貴重な体験になります。家族が毎日食事を作ってくれることの「たいへんさ・ありがたみ」を感じる機会となりますので、子どもたちが主体的に取り組めるよう配慮しましょう。
・　しかし、どれも初めての経験で子どもにとっては時間のかかることですので、初めのうちは大人の適切な支援も必要です。

運営側の留意点

献立の決定	食材の買出し	調理	片付け
・　子どもが調理可能な献立 ・　栄養のバランスに配慮	・　食材の予算 ・　適切な量の確認 ・　行き帰りの交通安全	・　役割分担 ・　調理時間の管理 ・　危険な行為の防止	・　片付けの手順 ・　全員での作業 ・　最後までしっかりと

4　食品の衛生管理

・　食中毒は、毎日食べている食事でも発生しています。普段、当たり前にしていることが、思わぬ食中毒を引き起こすことがあるのです。またウイルスによる食中毒が冬に多発していますので、衛生管理が大切です。

・　食事作りでの食中毒予防のポイントをチェックしてみましょう。

【ポイント】

①　調理する人の健康管理

②　作業前などの手洗い

③　調理器具の消毒

※　厚生労働省ホームページ中の「食中毒に関する情報」(http://www.mhlw.go.jp/topics/syokuchu/)などを参考に、衛生管理を徹底し、食中毒の防止を心がけましょう。

5　入浴の方法

・　子どもたちにとって、みんなと一緒にお風呂に入ることはとても楽しい思い出になります。

・　公民館などお風呂がない施設では、

①　銭湯・温泉施設などを利用する　　②　地域のお宅のお風呂を借用する（もらい湯）

などの方法が考えられ、公共のマナーを学ぶとてもよい機会となります。

・　「もらい湯」を実施するにあたっては、事前の準備が重要になります。事業の趣旨をしっかりと説明し、理解を得た上で協力していただきましょう。また、子どもが最終日にお礼に伺うなど、子どもと地域のつながりを深め、気持ちよく協力していただけるような配慮も大切です。

6　洗濯･宿泊について

【洗　濯】

・　洗濯は、宿泊施設の設備環境で柔軟に対応しましょう。

①　洗濯機や洗濯板を使って洗濯

②　着替えを日数分用意し、洗濯せず持ち帰る

【寝　具】

・　寝具についても、開催する季節や経費等の状況に応じて工夫しましょう。

①　寝袋やタオルケットなどの寝具を家から持参

②　布団レンタルの利用

・　通学合宿では「平日の宿泊」が必須となるため、宿直を担当するスタッフに大きな負担がかかってしまいます。また、子どもたちも、環境に慣れるまでなかなか眠れないことが予想されます。役割分担を適切に行い、特定の人に負担をかけないような配慮が必要です。

7　自由時間の活動

・　通学合宿の期間中は、テレビ、ゲーム機、マンガなどは持ち込まず、子どもたち自身が集団遊びをつくり出すような活動が望まれます。その際、高学年の子どもがリーダーシップをとるようにし、大人は指示するのではなく、なるべく活動を見守るようにしましょう。

・　自由時間の過ごし方について、班や子どもたち全員で話し合うようにしましょう。また、トラブルなどについても、できるだけ自分たちで問題解決できるよう関わり方を工夫しましょう。

・　スポーツや文化など、地域の特色ある活動ができる環境をさりげなく整えることも有効です。

安全管理について

○　寝食を伴って、子どもたちを一定期間預かる上で、安全管理は必要不可欠なものです。また、十分な安全管理対策は、プログラムやスタッフの質を高めることにもつながります。

1　安全面の対策

・　通学合宿を成功させるためには、事故等が起こらないことが第一です。そのため準備を万全に期するため、実施する上での危険な場面を想定し、予防法や対処法を検討しておきましょう。

〔危険の 2 大要因〕

①外的要因　（天候、場所、時間、施設、道具、動植物など）

②人的要因　（体力、疲労、動作、集団、感情、意欲、集中力など）

2　保険への加入

・　長期の宿泊を伴う事業なので、想定外の怪我や事故等が起こる可能性を踏まえ、傷害保険へ加入するとともに、損害賠償保険にも加入しておきましょう。（国内旅行保険など）

3　緊急連絡網の整備

・　運営スタッフの緊急連絡体制をつくり、事故等の際の連絡の手順を全員で確認しましょう。

・　参加者（保護者）、学校・教育委員会などの関係機関のほか、警察、救急病院などのリストを作成しておきます。警察・病院には事前に実施期間や場所などを知らせ、協力依頼しておくとよいでしょう。

予想される安全管理

「知っている」から
「している」へ

■　**登下校時の交通安全･不審者対応**

→　集団登下校、付添い人の配置、安全パトロールの依頼、声かけ運動

■　**調理時の注意**

→　包丁の扱い、火（ガス）の扱いなど事前研修の実施

■　**自由時間の活動での注意**

→　活動場所の限定、地域ボランティアの配置、危険物の持ち込み禁止など

■　**就寝時の注意**

→　夜間における緊急時の対応、宿直当番を配置

■　**健康管理**

→　参加者の健康管理、持病（ぜんそくなど）やアレルギーの事前調査

→　日常的なうがい・手洗いの励行

→　健康調査票、健康観察の確認

■　**施設管理上の危険箇所**

→　事前説明会（保護者説明会）で対応を説明

→　事前に施設を確認、改善できる箇所の対応

■　**中止基準**

→　災害、ウイルス性の感染症などの集団感染時など

4　事故等発生時の対応と事後処理

○　事故発生時の役割分担を事前にはっきりさせておくことが大切です。

事故の種類	対応･処置	事後の処理
けが・急病	1　応急対応 （1）応急処置 （2）必要と判断される場合、救急処置 2　緊急連絡 （1）保護者への連絡（けが等の状態） （2）病院への搬送の要不要の判断 （保護者の了承を得る） （3）実行委員会代表への連絡 3　連絡事項 （1）保護者・医療機関 →けが等の程度・発生状況等 （2）病院への搬送の要不要の判断 →医療機関の領収書等が保険請求時に必要となる旨を知らせる。	1　当事者にその後の様子を確認 2　治療費の領収書などのコピー 3　保険請求については実行委員会が実施 ●　連絡方法 スタッフ ↓ 実行委員長 （実施本部）→ 保護者・関係機関
食中毒や感染症	1　病院への搬送の要不要の判断 （保護者の了承を得る） 2　発症人数、症状、経過の把握 3　実行委員長へ連絡 4　保健所への発生報告 5　食事提供の中止や吐しゃ箇所等の塩素等による消毒 6　活動の継続について協議	1　事故発生時の状況確認（保健所による調査） 2　保健所による指導 3　保険請求については実行委員会が実施 ●　連絡方法 スタッフ ↓ 実行委員長 （実施本部）→ 保護者・関係機関
生命に関する重大事故	1　救急車の手配 2　保護者への連絡 3　必要であれば警察へ連絡 4　実行委員長へ連絡 5　市町村教委・学校へ連絡 6　活動の継続について協議 （最低１名は医療機関へ同行）	1　事後発生時の状況確認 2　事故報告書の作成 3　保険請求については実行委員会が実施 ●　連絡方法 スタッフ ↓　　※事故発生後直ちに 実行委員長 （実施本部）→ 保護者・関係機関 教育委員会・学校
物品損傷	1　損傷した物品の確認 2　その際の状況把握（聞き取り） 3　損傷した部分の写真撮影 4　施設管理者への連絡 5　対応について協議	1　修理確認と施設管理者への謝罪 2　保険請求については実行委員会が実施
火事・地震等の災害	1　活動を直ちに中止し、各施設の地震防災計画に基づいて避難 2　参加者人数確認、けがの有無の確認 3　保護者への連絡	1　終息後の帰宅や避難について協議・判断 2　保護者への引き渡し
不審者の侵入	1　不審者の入室・入場の防止 2　指示に従わない場合、警察へ通報 3　危険な場合、参加者の安全を確保し避難	1　施設管理者への事実連絡 2　必要に応じて 警察や学校等関係機関へ連絡

広報について（参加・協力者募集）

○　企画や準備が整ったら、いよいよ広報です。事業の趣旨を上手に伝え、地域の様々な人が関わることのできる「通学合宿」にしましょう。

（1）子どもへの広報	（2）地域住民への広報
地域の多くの子どもたちに参加してもらえるようするため、事前に学校の理解・協力を得て、学校を通じて公募することがよいでしょう。 また、広報誌や自治会の回覧板などで募集することは、地域住民に広く通学合宿の実施を知らせることにもつながり有効です。	実施本部のスタッフとは別に、地域の中で協力者（ボランティア）を募ることが重要になりますが、地域住民がそれぞれの立場・役割で参加できるような呼びかけをすることが大切です。 そのため、下の表のように必要とされる活動内容や時間帯をあらかじめ明確にして募集するとよいでしょう。

時間帯	協力を必要とする内容の例	想定される協力者
早　朝	朝食の準備、登校時の付き添い・見送りなど	保護者、PTA、見送り隊
夕　方	下校時の付き添い、見守り、夕食準備・片付けの支援、自由時間の活動補助など	自治会、青少年育成会、民生児童委員、健康推進員、老人会、中・高校生、大学生
夜　間	自由時間の活動補助、入浴の世話、宿直の協力など	自治会、青少年育成会、民生児童委員、健康推進員、老人会、高校生・大学生
その他	食材等の確保、お風呂の借用“もらい湯”の協力、体験活動の指導や支援、ボランティア体験など	地域住民、農家や地元企業など、体育指導委員、社会福祉協議会

平成△△年度通学合宿事業「○○○○子ども合宿」

○○○○子ども合宿　参加申込書

実施前の確認事項について

○　参加者や協力者が集まったら、実施に向けた具体的な準備をしましょう。参加する子どもの立場、子どもを預ける保護者の立場、運営･協力する立場など、それぞれの立場に立って確認することが大切です。

1　役割分担の確認

・　子どもたちの活動を支援する実施本部のスタッフ及び協力者（ボランティア）の役割分担を行動計画等（タイムテーブル）とともにまとめておきましょう。

・　多くの方に協力していただくためには、役割分担や、連絡や指示の方法を明確にしておくことが大切です。

・　また、実行委員長（副委員長）は全体を総括する役割として、それぞれの分担間の調整役・つなぎ役を担います。

スタッフの役割分担（例）

担　当	内　容
渉　　外	宿泊施設、学校など関係機関との連絡調整
庶務･会計	資料作成、保険手続、予算の管理
生活指導	子どもたちの生活指導、入浴指導
食　　事	献立の確認、食事づくりの指導
企画･レク	イベントの企画、出会いのつどい、別れのつどいの企画･進行
記　　録	各種会議、記録写真、アンケート

子どもたちの役割分担（例）

担　当	内　容
班　　長	班会議の進行、人数点呼、整列
生 活 係	荷物の整理整頓、そうじ後の確認
健 康 係	毎日の健康チェックと報告
食 事 係	食事のあいさつや片付けの確認
遊 び 係	グループ活動の企画

・　子どもたちにも役割をもたせることが大切です。役割を与えることで責任感をもち、それを果たすことで達成感･満足感を得ることができます。

・　自主的に行動できるように役割を事前研修（保護者説明会）等で決めておくとよいでしょう。

・　班人数は４～６人程度にし、各班に大人や学生リーダー（高校生・大学生等）がついてサポートすることが望ましいです。

2　宿泊場所･活動場所の現地確認

・　登下校の経路、自由時間等の活動場所、交通事情などの下調べをはじめ、事前に宿泊施設、設備、備品類を確認する必要があります。
・　トイレ、洗面所、調理道具、食器、テーブル、寝具、掃除道具などを確認し、不足するものは借用するなどの対応を検討します。購入物についても実施までに確認します。

3　事前説明会（保護者説明会･オリエンテーション）

・　申込みの際、保護者の同意を得る必要がありますが、あわせて事前説明会を開催し、参加者、保護者、主催者が事業のねらいについて共通認識を持つことが大切です。

【保護者への依頼事項例】
① 荷物の持ち込みについて（準備する荷物の内容、時間、場所）
② 健康状態・緊急連絡先の確認票の提出
③ 初日・最終日の送迎（時間・場所）

★　参加者に配付する通学合宿の「しおり」と同じものに必要な連絡事項を追記し、保護者にも渡しておきましょう。

実施時の留意事項について

1　異年齢グループの構成

・　子どもたちが異年齢集団の中で生活し交流することは、協調性、思いやりの心などをはぐくむことにつながります。
・　学年別ではなく、異学年構成のグループで活動することで、年上の子どもは、年下の子どもの手本となることを自覚し、面倒をみるようになります。また、年下の子どもは、年上の頼もしさにあこがれ、よい行動をまねるなど、行動が変化していきます。

2　大人の支援

・　「地域で子どもの育ちを支えよう」を合い言葉に、地域の様々な方にそれぞれの立場で参加していただけるように配慮しましょう。
・　登下校の見守り、食事づくり、食材提供、もらい湯、子どもとの遊び、宿題をみるなど、支援をお願いしたい内容を明確に、広報していくことが大切です。
・　また、適切な支援をしていただくために、協力いただく全ての大人に、「通学合宿」のねらいを丁寧に伝えましょう。
・　「通学合宿」を機に、地域の様々な団体と連携を図るとともに、高校生や大学生に活動支援の補助をしてもらうこともよいきっかけになります。

3　保護者への対応

・　保護者には事前に事業の趣旨を十分理解してもらうことが重要です。理解が得られていればトラブルも起こりにくいでしょう。
・　期間中の保護者の参加については、事業の趣旨を踏まえ、最小限に抑えることが望ましいと考えます。最終日の「別れのつどい」に参加いただき、子どもの様子を見ていただくなどの工夫をしましょう。
・　緊急時の保護者の連絡先は事前にしっかりと把握しておく必要があります。

子どもへの指導のポイント

○　指導する側（スタッフ、ボランティア等）が指導のポイントをしっかりと共有し、子どもたちと接することが大切です。

■ 働くこと

・　食事づくり、片付け、洗濯、寝具の片付け、整理整頓などの生活体験を通して、「働くことの大切さ」を教える。
・　何事にも手順があることを学び、次の活動の見通しを立てて行動することを教える。

■ 物を大切にすること

・　食べ物の大切さや生産者への感謝の気持ちをもつことを教える。
・　物を大切にする心を育てる。

■ 他人と共に暮らす喜びと難しさ

・　集団生活において「してはいけなこと」、「しなくてはならないこと」をしっかり教える。
・　力を合わせて生活することで協力する大切さや楽しさを教える。

■ 失敗に学ぶ大切さ

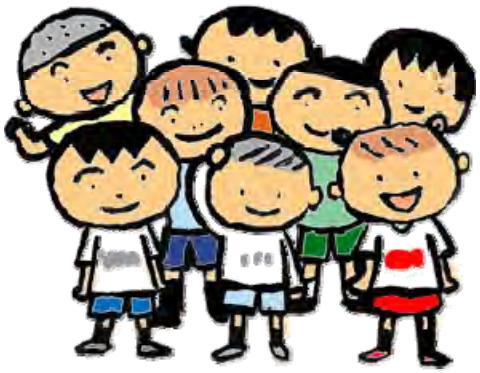
・　失敗があるから成功があること、失敗から多くのことを学ぶことを教える。
・　友だちとけんかすることがあっても仲直りできることを教える。

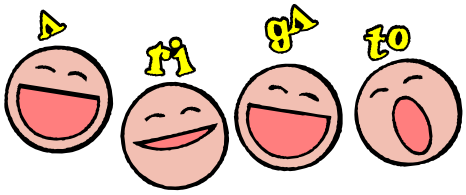
■ 創意工夫の楽しさ

・　体験、経験から学び、自ら創る楽しさを教える。
・　仲間とアイディアを出し合うことで、できることや楽しさが一層増えることに気付かせる。

■ 保護者･地域の方に感謝すること

・　普段の生活でも多くの人に支えられていることを知り、感謝する心を育てる。





実施後について

○　通学合宿は、実施後、成果や課題を検証し、関わった方々に対してフィードバックすることが大切です。地域主体だからこそ、「次への一歩」のアイディアと工夫が、事業をより地域に根ざしたものにします。

1　アンケート等の実施

■　この事業を地域で継続させていくためには、実施後に参加者・保護者に対するアンケートを実施するほか、協力していただいた地域の方々からの意見を聞き取り、次回の開催に向けた検討材料とする必要があります。

■　また、お世話になった地域の方々に、参加した子どもたちが手紙などで感謝の気持ちを伝えることも大切な活動です。子どもたちからの感謝の言葉は、地域の大人にとって、どんなお礼よりも格別な喜びとなるでしょう。

■　事業の様子を広報誌やホームページなどで情報発信すること、また、実施報告会を開くことなどで、さらに取組の輪を地域へ広げていく効果が期待できます。

2　事業経費の検証

■　事業を通じて必要となった経費を見直すことも、次回に向けての重要な検討事項です。継続的な実施のためには、少ない経費での実施が望まれます。節約できるところはどこか検証しましょう。

■　参加者から徴収する負担金額とあわせて、財政的な支援をどのくらい確保するかについても検討しておく必要があります。支援の依頼先としては、各自治体のほかＰＴＡ、自治会、地元商店街、企業なども考えられます。

節約の事例

★　食材の調達
　→　お米などは参加者が持参
　　食材提供を地域の農家に依頼

★　入浴施設の利用
　→　近隣のお宅にもらい湯を依頼

■　その他、“子どもゆめ基金”などの助成事業へ申請することも有効な手段です。（６６ページ参照）

3　地域の諸団体との連携構築

■　通学合宿をとおして集まった組織・個人からネットワークを拡大し、「地域の子どもは地域ではぐくむ」という機運を高めることが大切です。

■　また、これまで開催してきた地域行事などにおいても、横のつながりを生かすことで、地域の活性化につなげていくようにしましょう。

■　多様な世代が地域活動に参画できる「通学合宿」は、地域づくりを担う人材を育て、結びつける接着剤です！

Ⅲ　通学合宿基本プログラム例

プログラム構成を考え、実施し、評価をすることは、「通学合宿」の有効性を明らかにするとともに、その後の更なる改善など事業のステップアップにとても役立ちます。

ここでは、道教委モデル事業で実施し効果的だったプログラムを中心に、その企画のポイントや実際の参加者の感想・得られた効果などを御紹介します。

また、「保護者プログラム」は、子どもが直接行うプログラムではありませんが、事業の成果をより高めるとともに、保護者自身の意識を高め、家庭の教育力の向上を図る上でも、とても重要な役割を果たすことから、基本プログラムに組み込んでいます。

■　基本プログラムは、次の６つに分類しています。

1　生活体験プログラム
2　知育プログラム
3　体育プログラム
4　食育プログラム
5　独自プログラム
6　保護者プログラム

通学合宿の企画の視点

ねらいを踏まえた「目標」の設定
なぜ、誰のために、どの程度まで？

↓

目標達成に向けた内容の企画
誰が、いつ、どこで、何をどのように？

↓

事業の実施

↓

事業の評価
（IKR 評定、アンケートの活用など）

■　通学合宿のプログラムづくりにあたって

＜留意点＞

1　日常の生活体験をベースとして、子どもたちや地域の課題などを踏まえた「事業のねらい」を達成するためのプログラムを企画しましょう。

2　子どもたちが自ら目標をもって生活できるよう、子どもの自主性を大切にした内容にしましょう。

※「事業のねらい」を共有したスタッフの適切な指導・支援が重要です。

〔例〕

- 「生活のきまり」の一部や「めあて」を子どもたちで話し合わせる
- 毎日のふりかえり活動などで、行動の変容に気付くように支援する
- 小さな目標を一つ一つクリアし、実感できるように支援する
- 仲間と困難を乗り越えるなど、課題を解決する体験を盛り込む
- 想定内の「失敗体験」を大切にする

ポイント①

★　時間に余裕のある日程を！

プログラムの盛り込みすぎは、子どもの自主的な活動機会を減らし、また、疲労などにより学校生活にも影響してしまいます。自分で決めて過ごせる時間も大切に！

ポイント②

★　地域の方の出番も！

ちょっとしたことから地域の人たちが関われるよう、ボランティア協力や、指導・支援をしていただく機会を意図的に盛り込みましょう。応援団の輪が広がります。

ポイント③

★　１日のふりかえりを！

プログラムごとに活動をふりかえることも大切ですが、１日の終わりに生活全体をふりかえる時間をとり、子どもたちの頑張りを認め、翌日の意欲につなげるようにしましょう。

ポイント④

★　関係者のノウハウを活用！

教育委員会や青少年教育施設、社会教育施設などには、様々なプログラムや実施のノウハウ、人材情報などがあります。連携と協力で、地域ならではの通学合宿をつくりましょう。

ポイント⑤

★　次年度に向けて！

事業終了後、各プログラムの実施方法や構成を、ねらいに照らし合わせて見直すことで、その地域ならではの通学合宿となっていきます。毎年の積み上げによってブラッシュアップしていきましょう。

1　生活体験プログラム

メニュー例

普段の生活の中で必要な作業を仲間と協力して行う体験そのものが、通学合宿の醍醐味とも言えるプログラムです。

◇「掃除」：宿泊室、共同で使うスペースの掃除、ゴミ出しなど
◇「洗濯」：自分の衣類、共同で使っている物の洗濯
◇「布団のあげさげ」：毎日の布団のあげさげや、寝具の整理整頓
◇「入浴」：地域住民の協力を得て、お風呂を使わせていただく「もらい湯」、銭湯の利用

ポイントと工夫留意点

■ **普段の生活に必要な活動として位置付け、子どもたちが自分たちの力でできるよう、ゆとりをもった時間配分や、失敗経験ができるような環境づくりをする。**
→　仲間と協力することや考えて行動することの大切さに気付くよう配慮する。グループの目標づくりや役割分担、グループ担当のサポーター（学生ボランティア等）の配置が有効
→　「生活リズムチェックシート」を活用し、生活習慣の改善を実感できるよう支援

■ **「もらい湯」など地域の理解と協力を得て、より多くの住民が関われるよう工夫する。**
→　子どもたちからのお礼や、事業の様子をおたより等で知らせるなどの協力後の配慮で、事業に関わったことの喜びを感じてもらうことが重要

感想・効果

(子)：子どもの感想　(ボ)：ボランティアの感想　(効)：効果

(子)　「日頃お世話になっている家族の大切さを感じる機会となった。」
(子)　「自分の役割をきちんとできなかった。〇〇さんありがとう、明日はがんばります。」
(ボ)　「子どもたちと触れ合えて楽しかった。また、できることは協力していきたい。」
(効)　銭湯の使い方やマナーを知る機会となった。また、地域住民と交流を深めることで地域社会の一員としての自覚ができた。

2　知育プログラム

メニュー例

学習習慣や読書習慣の定着を図るプログラムです。子どもの学ぶ意欲や興味・関心を高めるための体験機会と捉え、幅広い分野について実施することが可能です。

◇　**学習編：** 個々の家庭学習、宿題、「チャレンジテスト」「プリントまなぼう」（道教委作成の学習シート）を活用した自主学習、学校や退職教員等との連携による「理科実験教室」など

◇　**読書編：** 司書や読み聞かせボランティアによる「ブックトーク」「読み聞かせ」、図書館やブックモービルを活用した「自主読書」、お互いにおすすめ本を紹介しあう「ビブリオバトル」など

◇　**地域編：** 地元施設を活用した「天体観測」「郷土館見学」「北方領土学習」、「アイヌ文化学習」など、地域について学ぶプログラム

ポイントと工夫留意点

■ **家庭における学習習慣や読書習慣の定着が図られるよう、目標をもって取り組むよう支援する。**

→　学生ボランティアや退職教員、指導主事等の協力を得て、個別の支援体制をつくる。

■ **地域の特色を生かした体験的なプログラムにより郷土愛をはぐくみ、地域との交流を促進する。**

→　教育委員会と連携し、地元の施設や指導人材など地域の教育資源を有効活用する。

■ **学習や読書の様々な方法を知り、進んで取り組めるような環境づくりをする。**

→　子どもの実態や課題に応じた体験プログラムを設定し、楽しく学べる機会とする。

感想・効果

(子)：子どもの感想　(効)：効果

(子)　「今日は遊んでしまい目標を達成できなかった。明日はがんばりたい。」
(子)　「毎日、学校の図書館に行くようになった。」
(効)　学生ボランティアの協力により、学習中の個別のサポートが充実した。
(子)　「みんなと一緒にいろんなことが体験できてうれしい。」
(子)　「読み聞かせがとても楽しかった。」
(効)　郷土学習により自分たちの暮らしている地域に関心をもち理解を深めることができた。
(効)　アイヌ文化のプログラムは、初めての参加者も多く貴重な体験機会となった。

3　体育プログラム

メニュー例

運動習慣を身に付け、健康な生活を送る意識の高揚を図る全身を使ったプログラムです。地域の方々と交流しながら、楽しく体を動かす機会となります。

◇　**「朝のラジオ体操」**：毎朝、規則正しい時間に体を動かし、頭と体を目覚めさせる
◇　**「ニュースポーツ」**：キンボール、ドッチビー、キックゴルフ、フロアカーリング等
◇　**「体力づくり活動」**：散歩（ウォーキング）、ジョギング、ボール運動など
◇　**「団体・サークルとの交流」**：「タグラグビー」「フラダンス」など
◇　**「外遊び」**：おにごっこ、缶けり、縄跳びなどの体を使った集団遊び

ポイントと工夫留意点

■**「早寝・早起き・朝ごはん」を意識し、規則正しい生活習慣を身に付けることや、進んで運動したり外で遊んだりする意欲を高められるような環境をつくる。**
■ **様々な種目との出会い、地域との交流が図れるような機会をつくる。**
→ 地域のスポーツ団体やサークルの協力を得ると、多様なプログラムが可能。

感想・効果

(子)：子どもの感想　(効)：効果

(子)　「体育プログラムはとても楽しかった。」
(子)　「勉強も運動も頑張りました。家でも頑張りたいです。」
(効)　地域の団体などの協力で、普段は体験できない種目を実施することができた。

４　食育プログラム

メニュー例

毎日の食事づくりをとおして、地元食材を使うことや食生活の大切さ、食の楽しさを学ぶとともに、自ら考え行動できる力を身に付けるプログラムです。

◇　「食事づくり」：毎日の自分たちの食事の献立づくり、買い出しや準備など
◇　「夕食会」：ボランティアとの共同作業での交流や、お世話になった地域の方たちへの手づくり夕食会など
◇　「伝統料理教室」：「アイヌ料理体験」など地域の人材やメニューを活かした体験
◇　「そば打ち体験」：地域のサークル会員等を講師とした体験プログラム

ポイントと工夫留意点

■ **地元食材の活用や、料理の手順、望ましい食生活について考えながら、仲間と協力して実践できるような環境をつくる。**

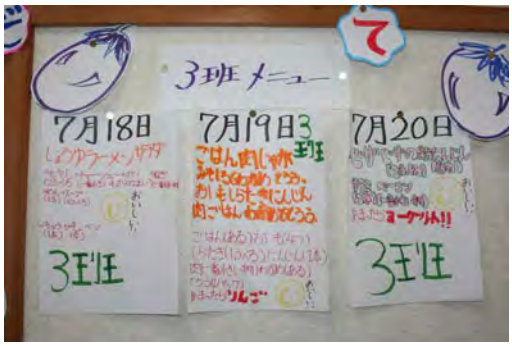
→　ボランティアや高学年の参加者が下の学年に教えながら、失敗経験もできるようにサポートする。

→　地元の農協・漁協、商店等との連携で、食材提供や買い物体験の支援を得ることも可能。

感想・効果

(子)：子どもの感想　(保)：保護者の感想　(効)：効果

(子)　「みんなで料理を作ることが楽しく、家事が自分でできるようになった。」
(子)　「嫌いな物が食べられるようになった。」
(保)　「夕食の準備など家でお手伝いしてくれるようになった。」
(効)　自分たちで毎日の献立づくりや炊事を行うことにより、家族への感謝の気持ちを持たせることができた。



5　独自プログラム

メニュー例

放課後の時間を活用し、地域の特色を生かした様々な活動や、子どもの課題を解決するための活動を実施することができます。地域との交流を一層深めることを目的としたプログラムです。

◇　**「自然体験」：** 薪割り、火おこし、野外炊飯などのアウトドア術、釣り体験、カヌー体験など、施設周辺の自然環境を活用したプログラム
◇　**「地域交流活動」：**座禅、陶芸体験、茶道体験など
◇　**「ボランティア体験」：**宿泊施設周辺の花だん除草、ゴミ拾いなど
◇　**「コミュニケーション活動」：**人間関係づくりや、課題解決を体験から学ぶグループワーク、レクリエーションゲームなど

ポイントと工夫留意点

■ **子どもたちが様々なことに興味・関心をもてる機会とする。**
■ **集団生活ならではの体験や、テーマやストーリー性のあるプログラムにすることで、独自の通学合宿づくりができる。**
→　技術習得よりも地域の教育資源や人材を活かした体験機会、交流機会となるようにする。
→　過度に体験を提供したり、学校生活に影響したりしないよう配慮する必要がある。選択制にすることも効果的。
→　生活体験や通常のプログラム以外に、休日のお楽しみプログラムとしての実施も効果的。

感想・効果

㊑：子どもの感想　㊐：効果

㊑　「新しい友だちができた。」「困ったときにも仲間と協力してがんばれた。」
㊐　毎朝、ラジオ体操終了後に花壇の除草作業を行い自然への関心が高まった。
㊐　住民に進んであいさつをしたり、相手の立場になって行動できるようになった。
㊐　地域の協力により朝や放課後の体験が充実した。

６　保護者プログラム

メニュー例

参加した子どもの保護者が、事業の目的を理解し、子育てや家庭での子どもの生活習慣について考える機会となります。また、子どもの参加をきっかけとして、地域活動への関心を高めるためにも有効なプログラムです。

◇　**「保護者学習会」：** 子どもの生活習慣や子育て、親子のコミュニケーションなどについての講話や保護者同士の交流

◇　**「保護者交流会」：** 通学合宿中の子どもたちの様子や成長などについて、スタッフや講師、学生ボランティア等と交流

◇　**「事業説明」「意見交換」：**通学合宿のねらいや内容の説明、主催者との意見交換等

◇　**「閉会式」：**保護者も一緒に参加し、子どもの様子や感想を交流

ポイントと工夫留意点

■ 望ましい生活習慣や体験活動を通じた「生きる力」の育成、子育てのポイントなどについて学習することにより、保護者の通学合宿の意義に対する理解を深める。

→　生活習慣と学力の相関関係についての講話、子どもの生活習慣の課題など具体的なテーマを設定し、保護者自らが意識を高め、実践につなげることができるよう構成する。

→　ＰＴＡ主催の研究大会等と合同で開催し、より多くの保護者を対象とすることも有効。

■ 合宿中の子どもの様子を垣間見ることのできる機会を設け、保護者の不安をサポートする。

→　各プログラムの写真のスライドショー（閉会式）、おたよりの配付など

■ 地域の多くの力によって支えられている事業であることを理解し、保護者自身が地域の大人として地域活動に積極的に関わる意欲を高められるよう配慮する。

→　１回目と２回目の間や通学合宿終了後に、事業の効果や次年度の構想について意見交換するなどして、取組に関わる機会をつくる。

保護者の感想

○　「子どもが多くの手伝いをしてくれていたことに気づけた。」

○　「子どもがいろいろな出来事を、とても楽しそうに話してくれた。」

○　「貴重な体験をさせることができ、子どもにとっても親にとっても、成長のきっかけになった。」

○　「とてもよい機会。特に親同士の話合いは、子育ての悩みを共有し、どうやって子どもと関わっていくかなどヒントをもらうことができた。」

○　「親自身、思い切って任せきれていない部分がある。あまり口を出さず、見守るように心がけたい。」

○　「たくさんの御協力がないと成り立たない企画だと思う。ありがとうございました。」